

モンゴルスタディツアー 1日目 ウランバートルに無事に到着

2019.07.30

本日より、第2回モンゴルスタディツアーがスタートしました。

成田14時20分発の予定の飛行機が17時頃の出発になりましたが、皆、無事にウランバートルのチンギスハーン国際空港に到着しました。

モンゴルは時間に関しても寛容です。そんな挨拶からスタートしましたが、いきなり飛行機の遅れというモンゴルタイムを経験することになりました。

このツアーでは、姉妹校である新モンゴル学園のサマーキャンプ、サマースクールに参加し、ホームステイもします。また、JICAや日本大使館の方のお話しも聞く予定です。

明日は、草原に出てゲルに泊まります。モンゴルの雄大な草原のように、雄大な心を身に付けて欲しいです。

1週間後の彼らの成長ぶりに今から期待してまいります。



成田空港で記念撮影



モンゴルスタディツアー 2日目 JICA 訪問・サマーキャンプ場に到着

2019.08.02

7月31日午前中、スフバートル広場、ガンダン寺を訪れた後、JICAモンゴル事務所に伺いました。モンゴルでの国際協力について学ぶことが目的でした。モンゴルは人口300万人で、その半分がウランバートルに住んでいて人口の一極集中が課題になっていること、冬季のストーブでの燃料の使用で大気汚染が生じていること、鉱物資源を売ることが大きな産業になっていること、プラスチック廃棄物を家畜が食べて死んでしまうことが生じていることなど、モンゴルの基本的な情報や課題についてわかりやすく教えていただきました。その後、教育支援について教えていただきました。モンゴルは学校が足りない状況で、一部(8:00~11:00)、二部(11:00~14:00)、三部(16:00~19:00)と1つの学校で3部制をとっているところのあることの事でした。この状況に生徒達は驚いていました。JICAの支援で多くの学校を建ててきており、今はインクルーシブ教育として、特別支援学級の設立に向けて力を入れているという話を聞きました。また、教育の地域間格差をなくすためにICT教材の普及についての取り組んでいるとのことでした。「インクルーシブ教育」「ICT教育」と本校でも取り組んでいる単語が出てきて、生徒達も興味を持って聞いていました。また、「モンゴルにはいじめがない」というお話しが生徒達にとって印象的だったようです。「どうして、いじめがないのか？」それがモンゴルの生徒達と触れ合う上での一つのキーワードとなりました。モンゴルの大草原に行って、新モンゴル学園の生徒達と触れ合っているとその答えがなんとなく見えてきた気がします。

午後は、新モンゴル学園のサマーキャンプ地に行きました。新モンゴル学園の生徒達の歓迎を受けた後、ゲルに荷物をおきました。その後に何をやるのか？それは決まっています。「何も計画が無い中で、その時の状況に応じてやることをやる」モンゴルの遊牧民ならではの発想であり、計画通りの事をこなしがちな日本人は戸惑うところではありますが、自然発生的にバスケが始まったり、バレーボールが始まったり、モンゴルの伝統的な遊びである「シャガイ」を使っている遊びが、新モンゴル学園の生徒と海城生が入り混じって行われました。バスケやバレーボールでは新モンゴル学園の生徒の身体能力の高さに圧倒される感じもありましたが、楽しく過ごすことができました。



スフバートル広場にて



ガンダン寺に



て

チベット仏教の寺院です



JICA モンゴル

事務所



質問も活発で楽しく学ぶことができました。



新モンゴル学園のサマーキャンプ地にて



モンゴルスタディツアー 3日目 草原を大満喫！

2019.08.03

7月31日、一日中、ゲルを拠点に草原で過ごしました。

7時に朝起きてのランニング、3km程度走りました。生徒はちょっと嫌がっているようでしたが。その後、体操、筋トレをしてからの朝食。とても健康的な朝の始まりとなりました。

今日は登山に行くとは聞いていましたが、いつ行くのかはわかりません。生徒も「いつ行くのですか？」と聞いてきますが、それは誰も知りません。「先の事ばかりを考えるのではなく、今を満喫する」そんな事を教えられているような気がしました。お昼前に何となく登山に行く雰囲気になり、肉揚げパンのような「ホーショル」をお弁当として持って登山に出掛けました。登山と言っても、ゲルの裏側のちょっとした山に登るハイキング程度のものでした。草原には黄色を主体とした花に様々な色の花が一面に咲き誇る、まるで天国のような草原でした。そうした中を歩いてのハイキングは格別のものでした。

山頂付近にはマツの林が広がっており、野生のイチゴなどを食べました。こんなにも美味しいのかという程に味の深いイチゴでした。まつぼっくりが大量に落ちており、それを海城生、新モンゴル学園の生徒で互いに投げあって遊びました。帰りの草原は赤系の色主体の草原でマツバランやワレモコウが咲き誇る草原を抜けてゲルに戻りました。

ゲルに戻ると、生徒達は水をかけあって遊びました。水に濡れてもすぐに乾くことに生徒達も驚いていました。

夕方、17時頃には「牛の乳搾り体験をする」という事になり、2km程歩いた先の酪農家のところに行って、乳搾りをしました。また、そのご家庭の馬にも乗せていただきました。突然、こうした体験ができるのも草原での生活の良いところです。

19時頃に夕飯を食べた後はスポーツ大会。バスケットボールやバレーボールの試合をした後、大草原でサッカーをしました。21時を過ぎて辺りが暗くなり始めるまで思いっきりスポーツを楽しみました。朝から晩まで思いっきり草原を満喫し、生徒達はヘトヘトでした。

夜に起きてゲルを出てみると、外には満点の星空が！ 天の川も見ることができました。

モンゴルの雄大な自然に驚くばかりでした。



朝のランニング



筋トレ

レの様子



朝ごはんはミルク粥でした



新モンゴルの生徒達とキャッチボール。モンゴルでは野球をする人は少ないようで、とても興味を持ってくれました。

草原で遊ぶ様子



物凄い密度のお花畑。これが自然に存在することに驚きです。



一面の花畑の中を歩いての登山



途中の岩場で集合写真



松林の中を歩きました。



山頂の岩場に到着！



まつぼっくりの投げ合い



牛の乳搾り体験



乗

馬体験



暗くなるまでサッカーをしました



ゲルと満点の星空！

モンゴルスタディツアー 4日目 草原からの帰還・日本大使館の訪問

8月1日、昨日と同様に朝7時に起床しランニングから始めました。21時過ぎまでサッカーをしていたこともあり、海城・新モンゴル学園の生徒ともに疲れていたため、軽めのランニングや筋トレをしました。朝食を食べた後、ゲルで荷物を整理して、名残惜しくもゲルを後にしました。

ウランバートルに戻ってからは、国立歴史博物館を訪ねた後、日本大使館へ向かいました。

在モンゴル日本国大使館では、林参事官にお話しをいただきました。生徒へ問いかけ、その回答に答える形でのお話しで、熱意のこもったとても面白いモンゴルのお話しを聞くことができました。モンゴルの方は「着るものや履くもの、乗るものにお金をかける。それはどうしてか？」そのヒントは遊牧生活に由来しています。一方で、私たち日本人達は着るものにお金をかけない人が多いです。それは、土地に執着する農耕という生活が関わっているからであるという比較は、モンゴルと日本を理解する上でとても有意義なものであり、生徒達も食い入るように聞いていました。

「遊牧民は状況の変化に柔軟に対応する。予測不能の中、即断をすることが遊牧民が生きていく上で大切である。」どうして、草原でのサマーキャンプで予定が無かったのか、その理由がわかった気がしました。予定をこなすだけでなく、状況に応じて臨機応変に対応する力、私たちに足りないものを気づかせてもらいました。モンゴルから学ぶことはたくさんあることを再認識しました。

また、林参事官がどうして、モンゴル日本国大使館に務めるようになったのか、外務省の仕事など、体験を交えながらの話は、とても興味深かったです。日本からあえてモンゴルという国で働く方々、その方々にはとても熱い思いがあることがわかりました。こうした人たちと出会い、交流して多くの刺激がもらう事ができるのもモンゴル研修の醍醐味だと感じました。

帰りにはザイサンの丘に立ち寄り、先の大戦で日本とモンゴルの間にも戦いがあったことを実感した後、宿舎に帰りました。



高1生のゲル。ゲルの前でお世話になった新モンゴル学園の先生を囲んで。



中学3年生のゲルの前で。



新モンゴル学園の生徒達が見送りをしてくれました。



国立歴史博物館にて。生徒達に疲れが見えます。



日本大使館でお話しを聞く様子



日本大使館にて参事官を囲んで。



ザイサンの丘からウランバートル市内を一望しました。



壁画を見て考えさせられるものがありました。

モンゴルスタディツアー 5日目 新モンゴル高校でのサマースクール&数学 四校対抗戦

2019.08.03

8月2日、朝から新モンゴル高校に伺いました。新モンゴル高校ではサマースクールを実施しており、日本語の授業を行っています。そこに生徒は混ざって授業を受けました。日本語の授業を受ける？そんなの意味あるの??そんな風に思うかもしれません。でも、生徒達の気づきは多かったです。例えば、中3の尾崎君は『「～間…」と「～間に…」の違いや、「～によって…」と「～によっては…」の違いなどがかなり細かく説明している。僕らが感覚で理解している事を文法的に解説している。日本で英語の授業で文法を学んでいるのに似ている。英語のネイティブの方が日本で英語の授業を受けたら同じ感覚になるのかもしれない。』という感想をもちました。海外で日本語の授業を受ける機会はなかなかありません。言語を学ぶという事はどのようなものか、得難い気づきを得ることができました。

お昼には、ナランバヤル校長先生と一緒に話しをしました。「学びとは何か」「判断力の大切さ」「好奇心を持ち続けよう」「将来の夢」などについて生徒と一緒に話をしました。校長先生の話はとても面白く、生徒達も聞き入っていました。生徒が「校長先生の夢は何ですか?」という問いに対する校長先生の夢の壮大さに生徒達はとても驚いていました。校長室から出た後の生徒達から「自分も頑張ろう」とする気持ちを感じることができました。

校長先生との対話の後は、「海城とはどういう学校か?」「日本の社会問題」「日本の遊び」「日本のサブカルチャー」についての発表をしました。日本のサブカルチャーでは、かなり難しいアニメのキャラクターをクイズに出しましたが、新モンゴル高校の生徒はそれも正解しました。日本の文化がとても浸透しているのを感じました。1時間の発表予定でしたが、授業の関係で30分に変更になったのにも関わらず、臨機応変に対応し、堂々と発表した彼らを見てるとモンゴル流のたくましさがついてきたようにも感じました。

この後、彼らは新モンゴル高校の生徒と共にホームステイ先に向かいました。

さて、一方、海城数学班は、海城、新モンゴル、オロンログ、新モンゴル日馬富士の生徒による四校対抗戦に参加しました。問題は全部で5問。1、2番を手堅く正解した海城チームですが、3番と4番を落とし劣勢に陥りました。

ここまでは答えのみを発表する問題でした。果たして、得点が多く、解法をプレゼンテーションする最後の第5問に賭けた海城チーム。

二人の判定委員の厳しいレフェリングを受けながらも堂々の満点を獲得。出題委員からは全く意図していない独創的な解法で実に素晴らしい、との賛辞を得ました。結果、海城と新モンゴル日馬富士が同点優勝に輝きました。数学班にとって、国際親善試合は勉強になったことでしょう。

殊に、新モンゴル日馬富士は、日馬富士理事長が、学園の学習の中核としてロボットコンテストを据え、現在、素晴らしい施設を建築中との説明を昨日受けていた(写真)だけに、理事長のサイエンススピリットが奏功したものと思われま。



日馬富士関に学校を案内してもらいました。

この後、海城数学班の研究発表が行われ、国際数学オリンピックのメダリストや、教育大学の数学教授の方々から高い評価を頂きました。

最後に、昨日既報の新城門プロジェクトからの合格第1号となる、モンゴル国立大学医学部の女子学生さんが駆けつけられ、新城門で、実に多彩な解法を学んだお陰で、800点中の760点のハイスコアを記録し合格に至ったこと、将来は脳の研究をし、世界に寄与したいとの抱負をもらいました。同時に、このプロジェクトから米国ジョーンズホプキンス大学医学部への合格者（女子学生）が出現したことも判明。同大学へはモンゴル国から初の進学者となるようで、大いに氣勢があがりました。後刻、彼女のインタビューもご報告する予定です。

ともあれ、四校の生徒の皆さん、先生方、応援に駆けつけられた生徒の保護者の皆様、有難うございました。



日本語のリスニングの授業を受けている様子



「孤」という漢字の払いなど書き方について生徒が教えました。



日本語の授業の様子



グループで自己紹介



日本語の文法の授業の様子



ナヤンバイル校長先生を囲んでの対話



ナランバイル校長先生を囲んで



学校紹介の発表。



日本の社会問題の発表



日本の遊びの発表



サブカルチャーの発表の様子



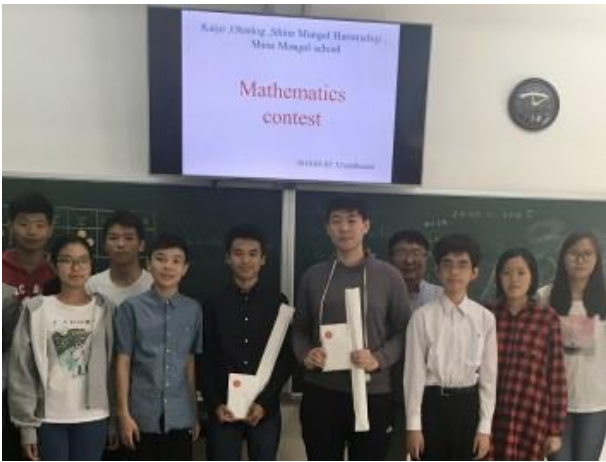
数学四校対抗戦の様子



解答を出すときはドキドキしますね。

	I	II	III	IV	V	HWIT	EWAP
KAIJO	●●	●●			●●●	8	I
DLOWLOG		●●	●●	●●		6	II
SHINE-MONOOL HAKUMAFUJI	●●	●●	●●	●●		8	II
SHINE-MONOOL	●●	●●	●●			6	II

数学四校対抗戦の結果



数学四校対抗戦に参加した生徒達

モンゴルスタディツアー 6日目 ウランバートル市内の歴史・ゆかりの地を巡る

2019.08.04

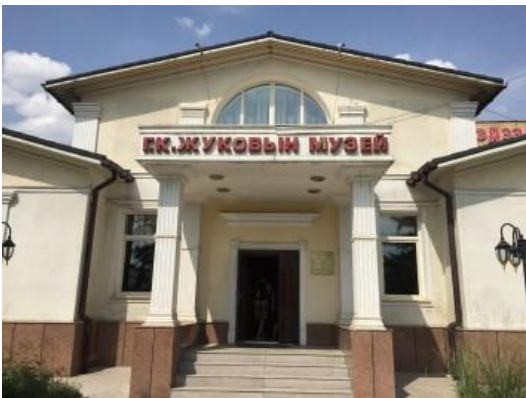
8月3日、生徒がホームステイ先に滞在している間、数学班として市内に残っている打越君と教員でウランバートル市内を観光してきました。案内役を務めて下さったのは、日本語が堪能な新モンゴル高校2年生のドルギオンさん。彼に通訳して頂きながら、ウランバートル駅、ジュエコフ博物館、ダンバダルジャーの日本人墓地を巡ってきました。



ウランバートル駅ホーム

車社会のウランバートルに住む方々は普段鉄道を使うことはあまりないそうですが、ウランバートル駅には北京やモスクワ行きの国際列車も乗り入れています。残念ながらこの日は姿を見ることはできませんでしたが、広大なプラットフォームから異国へ列車が旅立つ姿は想像力をかきたてられそうです。

ジューコフ博物館は、旧ソ連の軍人ゲオルギー・ジューコフ将軍の事績を顕彰する施設です。ジューコフ将軍は、1939年、日本の傀儡であった満州国と、ソ連の事実上の保護下にあったモンゴルとの国境で発生した武力衝突「ノモンハン事件」で、モンゴル側を支援したソ連軍の司令官を務めた人物です。モンゴルとロシアの友好を象徴する施設でもあり、ロシアからプーチン氏が訪れたこともあります。



ジューコフ博物館



ジューコフの像

当時のモンゴルにとって日本は戦争相手国であり、対日感情への影響が気になりました。しかし博物館を管理されている方に率直に伺ったところ、この戦いの際に助けてくれたロシアには感謝しているが、現在では日本のことを悪く言う人はいないとのこと。最後に向かったのは、郊外にあるダンバダルジャーの日本人墓地です。第二次世界大戦の終戦直前、満州に侵攻したソ連軍により、現地に居た数十万人の日本人が捕虜にされました。そのうち12000人あまりがモンゴルに送られ、戦後のウランバートルの建設ラッシュに動員され多くの犠牲者を出しました。ダンバダルジャーでは、祖国を見ることなく亡くなった800人あまりの日本人を偲ぶ慰霊碑が建てられており、私たちも手を合わせてきました。墓地を管理されているモンゴル人の方によると、モンゴル側の協力もあり、現在では遺骨の多くが日本に返還されているそうです。



日本人墓地



日本人墓地慰霊碑

この日お会いしたモンゴル人の方々の言葉からは、歴史をしっかりと記憶しつつも、近隣国と良好な関係を保とうとする積極的な姿勢が伝わってきました。モンゴルという国は非常に親日的だと感じますが、それは過去の禍根を乗り越えた先人の努力によるものであると言えます。私たちもそうした取り組みを続けていく必要があるでしょう。

モンゴルスタディツアー 7日目 ホームステイ先との別れ

2019.08.05

8月4日16時、宿泊先のホテルに生徒達がホームステイ先のホストファミリーと一緒に戻ってきました。ホームステイはとても充実していたようで、ホストファミリーと別れの様子は見ているとこちらが涙を流しそうになりました。ウランバートル市内や郊外、様々な場所に連れて行ってもらえたようで、とても良い経験ができたようです。ホテルに着いてからも、食事中も、バスの移動中もそれぞれがホームステイ先の事について楽しそうに語っていました。これが充実していたことを示すなよりの証拠ですね。かけがえの無い思い出ができたこと、嬉しく思います。さて、皆が戻った後は、モンゴルの伝統的な歌舞ショーを見に行きました。この舞台となる場所は国立オペラ劇場。この華麗な建物は大战後、シベリア抑留された日本人捕虜の方々がウランバートルに派遣されて造られたと言われています。歴史を感じる建物の中での歌舞ショーの見学は楽しくも考えさせられるものがありました。明日、名残惜しくもウランバートルを去り、日本に帰ります。

ホストファミリーとの別れ



国立オペラ劇場の前にて



夕飯の風景



数学四

校対抗戦優勝おめでとう！ 優勝を讀んで！！

モンゴルスタディツアー 8日目 無事に日本に到着！

2019.08.05

8月5日、7時40分にウランバートル発の飛行機に乗るため、朝早くに起きて頑張って空港に行きました。しかし、飛行機は定刻よりも4時間遅れでの出発となりました。それでも、生徒達から不満の声は少なく、こうした状況でも臨機応変に対応できる力が身につけているなと感じました。まさに、今回のスタディツアーのキーワードでもある「臨機応変な対応」が彼らに身につけているようで、頼もしく思いました。4時間遅れとなりましたが、無事に成田空港に到着しました。生徒達から「また、モンゴルに行きたい！」そんな声が複数聞こえました。それだけ充実した滞在になったのかなと思います。

今回は、サマーキャンプやサマースクール、ホームステイなど、新モンゴル学園の方々には大変お世話になりました。両校の関係もより深まったと思います。今後も引き続き交流を続けていきたいと思います。

